

大東ふれふれ帳

(16)

七五三まいり

古代から我が国では、七・五・三という数を縁起のよいものとし、子供の生育のけじめとしても、七歳という年は非常に大切な折りと考えられてきた。

ここに七五三まいりのルーツにちよつとふれてみると、子供が誕生して数え年三歳になると男女とも髪置(かみおき)式(円形に整髪する)があり、男児の五歳では着袴(ちやっこ)の式(袴の着け初めをする)があり、そして女兒の七歳では帯直(おびなお)し式(きもの付けひもをと

り、縫い上げをおろし、結び帯にする)など身分によって服装や持ち物も異なる。

その吉日には小袖、袴、扇子など揃えて広蓋(ひろぶた)にのせ、座敷の中央

に置き、子供を恵方(えほう)に向かつて立たせ着付する。袴などは左足から着せるひとつの商法であったらしい。

昭和の初めごろの七五三まいりの様子は、男児は陸軍将校の正装を模擬したもので、紋付に羽織袴すがた、女児のなかには、憧(あこが)れの女学生の服装で氏神さまに詣でたとか。

しかしまだ一般庶民のなかでは、そう華やかに行われていなかった。

「この子の七ツのお祝いにお札を納めにまいります」この唄もそんなところから生まれたのでしようか。いわゆるハレの日であった。

しかし、その始まりは公家(くげ)でもなく、武家からの伝承でもない、また着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

しかし、その始まりは公家(くげ)でもなく、武家からの伝承でもない、また着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

子供の幸せを願う親心から思い思いの服装で美しく着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

「この子の七ツのお祝いにお札を納めにまいります」この唄もそんなところから生まれたのでしようか。いわゆるハレの日であった。

しかし、その始まりは公家(くげ)でもなく、武家からの伝承でもない、また着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

「この子の七ツのお祝いにお札を納めにまいります」この唄もそんなところから生まれたのでしようか。いわゆるハレの日であった。

しかし、その始まりは公家(くげ)でもなく、武家からの伝承でもない、また着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

「この子の七ツのお祝いにお札を納めにまいります」この唄もそんなところから生まれたのでしようか。いわゆるハレの日であった。

しかし、その始まりは公家(くげ)でもなく、武家からの伝承でもない、また着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

「この子の七ツのお祝いにお札を納めにまいります」この唄もそんなところから生まれたのでしようか。いわゆるハレの日であった。

しかし、その始まりは公家(くげ)でもなく、武家からの伝承でもない、また着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

「この子の七ツのお祝いにお札を納めにまいります」この唄もそんなところから生まれたのでしようか。いわゆるハレの日であった。

しかし、その始まりは公家(くげ)でもなく、武家からの伝承でもない、また着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

「この子の七ツのお祝いにお札を納めにまいります」この唄もそんなところから生まれたのでしようか。いわゆるハレの日であった。

しかし、その始まりは公家(くげ)でもなく、武家からの伝承でもない、また着飾って、七五三のお祝いに神社やお寺におまいりするのがひとつの行事として定着した。

六月三十日、茅の輪くぐりである。近年では保母さんに引率(おおほらえ)式のある三箇の菅原神社でも十一月十五日、その前後の日々も多くの七五三まいりにぎわう。

まるでフランス人形のよ

うな服装や、桃割れに髪を結った長い袖(たもと)の

児、男の児はモーニング姿でミニ紳士とおしゃれ。

おみやげの千歳飴をしっ

かり持って、なかには着疲

れたのか、父親に抱っこ

してもらって、親ごさんも

うれしい心なごむひととき

元禄袖のきものに被布

(ひふ)を着せてもらい、

ちよつぱり着ぶくれた三

歳ぐらゐの女の児など見る

に愛らしく、この児らの健

やかな成長に息災を願ひ平

和な日々が続くことを祈り



千歳飴を手をうれしそう
(三箇菅原神社)

文・岩橋初子